

ほな、歴史通信

第100号
2021(令和3).9.1

経済と歴史の関係性について

高梨哲彦

歴史上の出来事の多くは、その地域や国の経済活動が時に大きく影響を与えている。歴史と経済活動は密接に連携し、刺激し合い、経済が成長・後退する中で、人々は知恵を絞りながら生活の基盤を練り直し、現在まで歩んできた。

私が社会人になった頃、日本はバブル経済終盤とはいえ、まだ羽振りのよい空気が漂っていた。企業は社員確保に多大な資金を投入し、このまま右肩上がりの成長が続くと皆が漠然と考えていた。しかしバブルは崩壊し、企業は緊縮財政の中で生き残りをかけ、事業を縮小したり諦めた会社も多くあった。さらにリーマンショック、デフレを伴う平成の大不況等、日本は長きにわたる様々な困難と闘い続けることになった。

平成の末期、海外富裕層旅行者の入国条件が緩和され、インバウンド効果による経済復活が軌道に乗り始めた頃、新型コロナウイルスという新たな課題に直面し、人類の経済活動が中断された。現在はワクチン接種が進み、治療薬の開発が行われているが、世界規模で経済活動に打撃を与えたこの出来事は、歴史の一ページに間違いなく記録されるものである。

このような中、国では少子化対策やデジタル化、新しい人流の

創生、災害に強い自治体づくり等アフターコロナを見据えた大きな目標として位置づけている。

大きな変革期を迎える今、大子町は今後何をすべきかと考える時、私は持続可能な社会保障を含む基盤づくりと、町の担い手となる次世代の育成が大きな柱になると考える。大子町には豊かな自然や歴史を回帰できる物がたくさん残されており、国内観光需要に呼応し今後も経済復興と共に良い痕跡を残していけるだろう。

そのためには、進むキャッシュレス化にも対応することは必須だが、ICT化に抵抗のある方々へ配慮しながら柔軟に進めていくことが重要である。都会に住む子供や孫たちが、田舎に住む家族にネットを通じてプレゼントを贈ったり、旅行代金をチャージするといった事もすでに始まっており、社会のICT化は、世代や住む地域の違いを超え、一切を巻き込みながら速いスピードで進んでいる。この融合は、都会では住民の力で自然に進むだろうが、大子町のように過疎化の進む地域では、ある程度政治が先頭に立つことが必要であり、政治が調整力を発揮し、誰も置いてきぼりにしないことが重要である。

若者たちには、その能力を磨き、町の未来を支えてもらいたい。少子高齢化のため数十年は工夫が必要となるが、先端の技術を学ぶと同時に、町の歴史を知り、町を愛する心を育んでほしい。

町には、先人たちの歴史を記録した書物がたくさん残されており、おのおのが時代を必死に生き、充足した人生をつかもうと努めた物語を読むと、私も共感し感銘を受ける部分がたくさんある。真摯に生きた先人の背中を見て、ついていこうと思う若者は必ずいる。そう思っただけで日々力いっぱい生きることが、後世につながる町の歴史の一ページになるのだろう。

参考文献 『コロナと経済』

財務省 財務総合政策研究所

(大子町長)

「保内郷」の由来を考える

大子地方を指し示す言葉として、古い頃から「依上保(郷)」「保内」「保内郷」「大子」「奥久慈」の五つが使われてきました。この中でも、古くからの表現である「保内郷」は、今も町民の間で使われています。この「保内郷」という言葉が、いつ頃から使われ、どのように誕生したのかを考えてみたいと思います。

「保内郷」は、「保内」地域の「郷」という意味となり、もともと「保内」という地域呼称をもとに使われ始めた言葉です。本誌のタイトルでもある「ほない」(保内)は、「依上保内」が次第に省略されて使われていった言葉で、一六世紀前半から使われることとなります(初見は大永三年(一五二三))。「保内」(依上保)は二四の村からなるとされています(「八槻文書」)。それは、黒沢・片岡・欽柄(左貫)・初原・塙・芦野倉・関田・相川・山田・高岡(上岡)・悪本・浅川・榎野地・矢田野・池田・松沼・袋田・田気・頃藤・小川・高柴・生瀬・大野・立神で、現在の大子町域をほぼカバーするような範囲となっています。これ以降、戦国時代・江戸時代を通じて、大子地域は「保内」と呼ばれていきます。

「保内郷」の言葉が初めて確認されるのは、管見の限りでは、元禄十四年(一七〇二)のことです。「近津家伝文書并近世由緒書」(菊池正勝氏所蔵文書)という、下野宮近津神社が所蔵する古文書とその由緒を記した古文書の中に、「一、役銭取帳 二冊 永禄十歳保内郷中 天正四年 佐竹義重」(傍線部は筆者、以下同じ)と記されています。この部分は、近津神社の古文書を書き上げている所で、近津神社造営のための役銭が、永禄十年(一五六七)には「保内郷」全域に賦課されていたことがわかる史料です。残念ながら、「役銭取帳」自体が残されていないため、「保内郷」が戦国時代から使われていたのかどうかはわかりませんが、少なくとも

江戸時代の中期頃には使われるようになっていたことがわかります。

大子村出身の黒崎貞孝が記し、文政九年(一八二六)春に出版された「常陸紀行」という書物には、「久慈郡北郡を依上、保内の郷といひて、昔時は廿四ヶ村也しが、今は四十二ヶ村となれり：下野宮近津社、保内郷の惣鎮守にして、廿四ヶ村へ年兩度神輿出御し大祭礼あり」と書かれています。このことから、十九世紀前半段階では、「保内郷」という言葉が当たり前の表現として使われるようになっていたことがわかるとともに、保内四二ヶ村(昔は二四ヶ村)が「保内郷」の範囲であったことが読み取れます。しかし、同時代に書かれた「水府志料」には、「保内郷 いづれの頃より此称ありといふ事詳ならず」とあるように、江戸時代後半の段階で、「保内郷」はいつから使われていたのかがわからなくなってしまっていた状態でした。

それではなぜ、「保内」が「保内郷」として呼ばれるようになったのでしょうか。「郷」というのは、複数の村が集まった地域を指す名称で、必ずしも制度的に整えられた地域呼称ではありません。むしろ、もともとまとまりのあった地域を慣習的に一つの地域として呼ぶ場合に使われたものとなります。そのため、戦国期以来二四の村が集まってまとまりのあった「保内」地域が、江戸時代中期の頃からは自然と「保内の郷」として呼ばれるようになります。それが地域呼称として定着していったものと思われる。

江戸時代後期には、水戸藩によって行政区域の整備が行われ、「保内郷」の村も「大子組」や「小里組」に編入されて統治されますが、「保内」「保内郷」の呼称は並行して使われています。そのため、現在使われている「大子」という呼称が行政的な地域区分としての意味合いが強いのに対し、「保内郷」は古くから使われ続けた地域の側から生まれた呼称だったのです。

郷土を愛すること

松本成夫

『ほない歴史通信』が、ここに一〇〇号を記念して発刊するに至りましたこと、誠に慶祝に存じます。平成八年（一九九六）の創刊以来、休刊することなく実に二五年間、我が郷土太子町の歴史・文化・民俗・教育等に係る情報の発信を続けております。関係各位に深く敬意と感謝を申し上げます。

郷土を愛することは、すなわち己の生き方に矜持を抱くことであると思います。郷土にありて郷土を支え骨身を惜しまぬ者あり、志を得ざれば再びこの地を踏まぬと決意する者あり、志を果たしていつの日にか帰らんと希求する者あり、人皆それぞれです。郷土はまさに郷里であり、郷里はまさに我が心の故郷であります。

厳然たる歴史に「もしも」や「たられば」はありませんが、不心得者の私は一人夢想の世界に入ってしまうのです。

佐竹氏が秋田に移封されずここ常陸国に残っていたら、どうなつたのでしょうか。佐竹源氏は義宣（二十代）の時代、諸豪族を破り常陸国内を統一、五万五八〇〇石の大領主となりました。しかし、関ヶ原の合戦から二年後、徳川家康から義宣は秋田への国替え（二〇万石）を命ぜられ、四〇〇年以上続いた父祖伝来の地を去りました。供をした者わずか九三騎ということでした。

常陸の海ではハタハタが捕れなくなり殿様と一緒に秋田の海に行ったとの話、金銀鉱も地下を通って秋田に移ったという話などがまことしやかにささやかれました。現代に残る昔話や山城（遺跡）などの多くは佐竹時代によるものです。江戸時代初期の一村皆殺しの伝承が残る「生瀬の乱」は佐竹氏が去った後の残虐非道なものであります。

次に、水戸徳川家が学問の府になっていなければ、水戸藩はどうなつたのでしょうか。徳川御三家の一つであり、將軍に一番近い武家の棟梁の家柄でした。光圀から始まった「大日本史」編纂が時代の流れとともに脈々と続きました（完成は明治三十九年（一九〇六）、日露戦争の頃）。学は水府にあり、と幕末の志士が醸成される原動力となりました。特に斉昭の頃に唱えられた水戸の思想は幕末の尊皇攘夷運動の中心となつて全国に展開されました。

その過程で藩内の抗争が激化し、改革派と門閥派の対立は天狗派と諸生派の争乱を引き起こし、藩を二分する抗争に突入しました。筑波勢・大発勢・武田勢等は太子村で大同団結、天狗党として旗揚げし、京都に向けて雪中行軍を続ける中、新保宿（福井県敦賀市）で八百余名が降伏、三百五十余名の斬首という前代未聞の惨劇となりました。その後、武田耕雲斎の息子・金次郎らによる諸生派への血の粛清が鎮まるのは明治二、三年の頃といえます。

水戸藩は幕末期に時代の魁（さがけ）となりながら、血で血を洗う藩内抗争で有為な人材が歿し、明治政府を主導する首脳となることはありませんでした。「尊皇」と「攘夷」を振りかざしていた長州・薩摩の両藩は、一気に方向転換を図り武力討幕への道を歩みました。外様の執念の深さを思い知るところです。水戸藩は最後まで幕府を支える側でありました。一刻者（頑固者）と言われる水戸藩の気質に寄与するものは何でありましょうか。水戸藩内の抗争・瓦解も辿り着くところ「大日本史」であり、「水戸学」です。日本の歴史の中で幕府と皇室をどう位置付けるのかというテーマではありますが、幕末動乱の激動の渦中において無謬性を求めることは困難であつたことが推考されます。

「大日本史」編纂は広く「水戸学」を全国に知らしめただけでなく、佐竹藩移封後に土着した家臣団や領民を懐柔し統治するためにどのような資したかという視点でも興味あるところです。

（太子町教育長）

私の研究活動と大子町

源川真希

もう三五年も前になってしまいましたが、私は昭和初期に現大子町（保内郷）で展開された農業恐慌打開の運動の調査のために、しばしば足を運びました。当時私は大学院の学生であり、一九八六年（昭和六十一）は修士論文をまとめる年にあたっていました。

満洲事変が始まった一九三一年ごろから、茨城県も深刻な恐慌に襲われます。農産物価格が下落し、農家は負債を抱えていく時代です。当時の大子町農会では、経営の合理化を進め、品種改良や新しい商品作物を作って難局を打開する活動をしていました（本誌連載の井上和司「大子町の経済更生運動と農村改良劇『栄ゆく村』を参照）。農作物が売れず、負債のために食べるコメも差し押さえられてしまうような事例もみられ、そうした状況を打開するためには負債のモラトリアムを求めて、当時の帝国議会に請願が出されます。そのなかで署名を集めて議会に持参したり、議員に陳情したりする運動が茨城県や長野県などで盛んにおこなわれました。そうした動きの拠点のひとつが、ここ大子町であったわけです。

当時の「いはらき」新聞の報道から、この地域のいくつかの村で集会が行われ、恐慌を打開しようという声があがっていることがわかります。また地元の町・村役場や農会を主体として恐慌打開のためのさまざまな取り組みが行われます。先にみた大子町農会の試みもその一環でした。その当時のようすを少しでも知りたいたと考へ、齋藤典生先生を通じて、町史編さん室にうかがいました。まずは各村のようすを知る手がかりにということで、村役場文書をみせていただきました。宮川村役場の簿冊で、当時の財政状況を把握して社会経済的な背景を理解することができました。

また当時、恐慌打開を求める署名活動などにかかわっていた黒

沢村の佐藤昇様、そして佐原村の村長でありました國谷順一郎様や黒沢村の村長として活動された飯村紀一様のお宅で、貴重なお話をうかがうことができました。突然、手紙でインタビューの申し出をいたしました。みなさん大変歓迎をして下さいました。風光明媚な当地のようすとともに、非常に印象深いものがありました。以後も大子町や常陸太田市などに参りまして、何人かの方にインタビューをさせていただきました。

それから二〇年。教員として日本近現代史を教えるなか行っていた大学院の合宿で、大子町をおとずれました。出発までに学生たちと『大子町史』を使い、大正から昭和初期のこの地域の名称や当時の産物について勉強しました。もちろん袋田の滝などをめぐることも楽しみでしたが、歴史や産業の背景的な知識があったおかげで、普通の合宿とは違う知見を得ることができました。

昨年、『大子地域の旧町村長事績集』を頂戴し、以前お目にかかった方々、またお名前だけはよく存じ上げている方々について書かれているのを拝見し、非常に興味深く感じました。現在は、勤務先との関係で東京の近現代史を研究テーマにすることが多いのですが、大子町を調査するなかで学んだことは、非常に役に立っています。以前、大学のある八王子市の市史編さんに加わりました。現在の八王子市は絹織物を中心とした旧町と、周辺の農業を中心とした地域から成立しています。恐慌で織物が大きな打撃を受けたこともあり、この地域を大子町の状況と比較しながら考察することで、昭和恐慌期の農村の社会と経済について新しい発見ができました。今回、『大子地域の旧町村長事績集』と『新しい歴史通信』のバックナンバーを読ませていただき、いろいろと書きたいこともでてきましたが、このあたりにします。大子町を歩き学んだことを思い出し、今後もし引き続き私の現在活動する地域を中心に、人々の足跡を調べていきたいと思っています。

（東京都立大学人文社会学部教授）

広済寺の「水戸藩十九烈士」位牌と菊池忠衛門

飯村尋道

先頃、埼玉県川越市喜多町の広済寺（上原正俊住職）様から寺宝の「水戸藩十九烈士」位牌の写真が郵送され、水戸浪士の戒名など刻字の全容を知ることができた。

元治元年（一八六四）十月二十三日、水戸の尊王攘夷派（天狗党）である執政榊原新左衛門の率いる大発勢は部田野の戦いの後、幕府軍と結託した諸生派の策謀で投降し、同勢一五四名全員が罪人として関東二藩の大名衆に御預けとなった（小室薫氏（西金）所蔵「士民諸侯御預姓名録」）。



川越藩には二三〇名が預けられ九名が獄死した。藩主の松平大和守は一九名の遺骸を広済寺に埋葬し、水戸浪士の慰霊にと永代供養料一五両を寄付し、一九柱の位牌を当寺に奉納した。

位牌は高さ三五センチメートル、金箔を縁どった漆塗りの立派なもので、尊王攘夷の大義の為に殉難した志士らしく戒名は一九名全員が「義」で始まり、下は「勇信士」の六文字である。

一九名中、保内郷出身者は冥賀村の菊池忠衛門だけで、一三人目に「義高忠勇信士」、裏側に「慶應元乙丑七月三日 菊池忠右エ門」とある。菊池は一九名中の最高齢で六七歳、ちなみに最年少は門部村（那珂市）の小田倉捨吉（義孝善勇信士）で弱冠一九歳である。

太田村（常陸太田市）の郷士羽部簾蔵（位牌の一人目、義連意勇信士）が獄中で筆記した「川越侯御預々人姓名帳」（羽部道紀氏所蔵）によれば二三〇名は川越藩邸内の南北二棟の長屋と西揚屋の併せ

て一―部屋に収監された。菊池は羽部と同じ「南側壺番室」である。

羽部は「たとえ冥土で亡霊と相成候ても奸賊共を戮し、烈公（徳川斉昭）や大炊頭（松平頼徳・徳川藩主）様の御無念を晴らし慰め奉る」と、腹わたの煮えくり返る思いを遺書にしたため「敵の飯は喰えぬ」と絶食し、自害した。菊池らも同じ思いであつただろう。

菊池忠衛門は諱（いみな）隆英、小十人列の郷士で山横目、弓の名人で、天保四年（一八三三）、烈公が八溝山中で猪狩りをした時に大猪を射止め、烈公愛用の杖を褒美に拝領したと『幕末動乱遺聞』（石井良一著）に書いてある。「勤王殉國事蹟」（『大子町史料別冊六』）に「羽部簾蔵等と數百人ヲ卒へ部田野原ニ戦ひ炮丸胸ニ中」とあり、これが致命傷となつたのではないか。

先達で、日立の内田正人氏から曾祖父の収集された「惟知集」という文書の複写を頂いた。それは川越藩幽囚の尊攘志士らの辞世の句を収録したもので、菊池忠衛門の辞世が載っている。

奥山の老木に咲くる遅桜 今朝のあらしに花ぞ散るらむ



故山の前冥賀には古い墓地のみが残っている。忠衛門の墓碑の篆額「誠齋」は忠衛門の号で藤田東湖の書であり、撰文は東湖の次男藤田健で明治二十八年（一八九五）の建立である。

保内郷地方から川越藩に幽囚された者は二七名、内一六名が川越藩から佃島や赤沼獄に送られ、生きて再び故山の土を踏むことなく異郷の地で獄死した。

（水戸殉難志士の墓保存会、回天神社代議員）

栃原上集落の四社合同遷座祭

大森政夫

大子町栃原上集落では、集落内に祀られてあった守護神四社（山神社、雷神社、星宮神社、牛頭天王社）を平成二十八年四月二十四日に会所（元の栃原分校）隣の一角に合同遷座した。遷座に際しては、石宮を新調し、当時の区長小松清忠さん他有志の方々が参列し、益子保男神職（大沢）による合同遷座祭を斎行した。

この四社は、山上、林等に鎮座して、古くから栃原上集落の人々によって祀られていたもので、それぞれの例祭には、二人の代表者が参詣していた。

遷座にあたっては、過去には古老の厚い信仰心から許されなかった経緯もあったという。しかし、現在に至っては人口減とともに戸数も少なくなり、ますます高齢化が進む中で、集落の守護神である四社を身近な場所に遷座し、誰もいつでも参拝ができるようにと話がまとまったものであった。

なお、遷座祭の平成二十八年四月二十四日（午後三時斎行）を例祭日と定め、今後守護していくことになった。

合同遷座祭を斎行した四社は以下のとおりである。

○山神社（やまじんじや 山の神様）

御祭神 大山津見神（おおやまつみのかみ）

御利益 国家安泰、家内安全、夫婦和合

創建 不明 大正四年（一九一五）陰六月 屋根替

大山津見神というのは、大山に住むという意味で、すなわち大山を管理する山神というのが命名の由来である。

○雷神社（らいじんじや）

御祭神 別雷大神（わけいかづちのおおかみ）

御利益 落雷及び稲作の守護神、厄除け、開運の神、無病息

創建 災 不明 水戸藤澤山神應寺より勧請か？（棟札より）

大正四年（一九一五） 屋根葺き替

昭和二十四年（一九四九）四月十七日 新社殿

代表 小室金次郎外組中一同

○星宮神社（ほしのみやじんじや）

御祭神 根裂神（ねさくのかみ） 磐裂神（いわさくのかみ）

御利益 眼病消除、国家鎮護、諸産業の守護神

創建 天保四年（一八三三）一月吉日 為楽院より

明治二十八年（一八九五）旧十月吉日 新社殿

昭和三十三年（一九五八）旧七月十七日 新社殿奉納

青砥信之介 大工堀江清 世話人小室一郎 青砥

信之介

神仏習合の時代虚空蔵菩薩を祀り、その神の使いがウナギ（ヤツメウナギ）なので眼病に良い御利益があると言われる。

○牛頭天王社（ごずてんのうしや）

御祭神 牛頭天王（ごずてんのう）

御利益 無病息災、疫病退散

創建 弘化二年（一八四五） 巳九月吉日

安政四年（一八五七） 巳五月吉日 新社殿

昭和三十五年（一九六〇）旧六月十四日 新社殿

平成元年（一九八九）七月十六日 社殿改築

インドの神で非常な荒神であり、須佐之男命と類似点があることから習合され、京都の八坂神社をはじめ、愛知の津島神社などの祭神になっている。

（大子町頃藤在住）



合同遷座された守護神四社

祖母の結婚前までの暮らし（一九七三年聞き取り）

相沢一正

祖母のなつは久慈郡西金村曾根の六戸の一軒、永山家に明治十八年（一八八五）に生まれた。幼少の頃の永山家は田、畑、山林など近所の者に「そねまれた」程度にあり、奉公人もおいていた。半期の男一人（古分屋敷から）、六つくの男一人（同）に、叔父が一人来ていた。人手は十分だったので、イブシゴはとらなかつた。楮は白楮畑から切り出し、一定尺に切って束ねて釜でふかす。スダレを敷いてコシキをかけて。それから男がコシキを「がつー」とあけて、水をかけ表皮をとる。この釜でふかして表皮をとるまでが一昼夜の仕事。釜ふかしの間、若衆は餅を搗き、歌を歌い、餅にあんをつけて食べた。表皮をとった後、束ねて乾燥した。この作業は十一月いっぱい続けるが、人手は二〇人ぐらい来る。十二月いっぱい乾燥し上がり、正月になってから売る。庭先売りでは大田地の仲買人の大森さんが来た。それから金主におさめるのもある。永山家の金主は大田地にあり、「借りに行かなくとも金主の方から金を持って来る」という関係だった。

コンニャクは九月十月に芋を掘って穴に貯蔵（コンニャク玉収穫）、十一月、カンナを使って荒コンそぎ。十一月十二月、串に刺し、一〇本ずつ綱に通して乾燥すればあとは売るばかりだ。（水車で粉コンにする）永山家では多いときでは二二呎持ち込んだ。馬のある農家に頼んで、二俵ずつ馬に積んで運んだ。粉コンのついた「とびこ」を団子にしてゆでて食べた。

なつが一四歳の頃から家運が傾き始めた。天子様（天皇陛下）はとても偉い人だって、親から教えられた。国を守るから。日清戦争で笹峯の正二郎さんは軍隊に入って、字を習って家に手紙をよこされるようになった。

明治三十二年、一四歳の時、西金尋常小学校へ三月のうち一日だけ登校する。子守や風呂の水汲み、留守番で学校へ行かなかった。九歳の頃から五月の忙しい時には馬の草刈りもやった。入学だけでもしろと、役場からの強い達しで登校したが、先生の話（算術のやさしい質問などに馬鹿にされているようで面白くなくて、すぐに行くのをやめる。「ハナ ハト マメ カラカサ」の頃。一年生で、半年ぐらいで二年生に上がった人もいた。この頃は、小学校全部行くのはたいしたもんだった。

一五歳で笹峯の小野瀬宅へ子守に出る。「百姓できたから、なんぼしても厭で」一年間でやめる。

一七歳、叔父の桐原家へ半期の約束で手伝いに行く。楮やコンニャクなど百姓仕事をする。この年、大暴風でなつの実家、隠居などが倒壊する。

一八歳、西金の「かねか」へ奉公。二年間。家の借金を支払うのためで給金はない。実家へは正月と盆の二回帰宅（三晩）したが、その時小遣い二〇〇三〇銭貰った。また、夏、冬に仕着せ・帯を支給された。「かねか」は呉服・雑貨・米味噌などの万商い、養蚕経営、水車経営などを営んでいた。雇い人のうち、なつとなつの叔父は百姓仕事、耕三は粉コンや米搗き専門。主人はなつをこの耕三の嫁にと考えていたが、彼には、はつという恋人がいた。

「年季が増せども久慈川増すな増せば舟止め通われぬ」とはそのころ口ずさんだものだ。養蚕では養蚕教師を呼んだりしたが、失敗して損したこともある。その後、大旦那が亡くなってから「かねか」の経営は俄然駄目になる。なつが嫁になった時には「かねか」はなくなっていた。一九歳、舟生の呉服屋へ奉公する。一年。ここでの畑仕事は大麦、小麦、豆類を扱う。夜割りで足袋をこしらえた。この他にかきまわしもした。天下野の酒屋ではかきまわしの仕事をした。二二歳の正月に結婚した。

（那珂郡東海村在住）

道標の拓本採取調査の終了を前にして

綿引逸雄

戦の無い平和な江戸時代になると仏教などの宗教が庶民の間により広まり、坂東三十三観音霊場巡りや水戸三十三観音巡りを行ったり、近所の神社仏閣を巡ったりすることが盛んになり始めた。

人の移動が盛んになるにつれて、人々の便を図って現在に残る石製の道標が建てられた。

道標は普段からそこに住む人間にとって、生活上あまり重要な意味はない。しかし、初めてそこを通る旅人にとっては、大変ありがたい存在である。地図もナビも無い時代である。旅人をどんなにか勇気づけたことと思われる。

車が主な移動手段になり交通路も変わった現在は、昔に建てられた道標が役立つことはほとんどなくなり、昔を偲ぶ存在のひとつになってしまった。しかし、地域の古人が一生懸命に生きてきたという地域の過去を知る手掛かりである。昔から篤く信仰されてきた八溝山やその周辺にどのような道標が建っているのかを追求しようと、大子郷土史の会として町内外を訪ね始めたのは、コロナ禍の中の昨年初夏であった。

訪ねるに当り参考とした文献は、『大子の石仏』と『大子地方の道標』の二冊である。両書を手にも道標を訪ねたが、なかなかたどり着けなかった。それもそのはず、『大子の石仏』発行から二〇年以上経ち、地域状況は大きく変わっていた。車が通れる新しい道が造られる一方、目印となる商店や民家などが無くなるなど大きく様変わりしていた。人家で石仏の在り処を老人に尋ねようにも代替わりしているため若い人ではわからず、また道を尋ねようと民家を訪ねても無人となってしまう例が多い状態だった。

その中で、道標を確認するまでのエピソードを紹介する。

一 何度も何度もその地域を訪ね道標を探した。地元の方にも聞いたが、多くの人はその存在を知らなかった。ある一軒でやっとわかった。わからないはずである。その道標はお堂の中に大切に祀られてあった。

二 一月某日、集落から離れたある沢の奥を訪ね、いつものように画仙紙を水貼りし、墨を打つ拓本採取の作業を行った。終了して、いざ剥がそうとしても剥がれない。あまりの寒さのため紙は石碑面に凍りついていていた。春に再び訪ねることになった。

三 先人の調査によると、三〇基ほどの石造物が沢の入口である分岐点に建っていたとのこと。しかし、探しても見つからなかった。半ば諦めていたら、後日仲間の一人が川中で裏返しの状態になっている道標をみつけた。林道建設工事で沢へ落ちたのか？ それにしても、他はどこへいったのか？ 川の中に入って拓本を採るのは初めての経験である。

今回の調査で新しく十数基の道標を確認した。また、苔むした既知の道標に新しい文字を確認するなどの成果を上げることができ、町内の道標は八〇基と増えた。

地域の人々の手によって保護措置がなされて大切にされてきている例や、説明板が建てられ活用されている例がある一方、子どもが触れた場合倒れて事故の起きる心配のある例、盗難を受ける可能性がある例があった。

どの道標も地域の古人が一生懸命に生き抜いて建てた証であり、後の人々が代々大切にしてきたものである。この数十年で粗末に扱われるのは残念である。これら道標を含めたたくさんの方の石造物を活かすことが、町おこしのひとつにならないだろうか。

今後どのように保存し、どのように活用するか、私たちが問われているように思う。

(日立市在住)

袋田小学校玄関前庭の道標

野内正美

道標(道しるべ)は、人や物の移動、地域とのつながりを示すものです。現在、大子地方で約八〇基を確認しました。「大子郷土史の会」では、道標(石造物)の拓本を採り、本づくりを進めています。今回は、袋田小学校玄関前の道標を紹介しましょう。

○銘文 右 やま道 左 小中 太田道

○建立年代 明治六年酉三月

○建立者 ヤマニ 桜岡氏立之

戦後の道路改修などの理由で、月居峠の光明寺の寺守りの長山さんが、桜岡本家の桜岡長良氏に届け、それを桜岡長良氏が袋田小学校に寄贈しました。もとは、月居山中にあったものです。この道標は、江戸時代に「東浜魚荷の道」(『新編常陸国誌』)と呼ばれた月居峠の様子が残る明治六年(一八七三)に建立されました。旧月居トンネル(月居隧道、長さ約二五〇メートル)ができたのは明治十九年(一八八六)であり、それ以前に建立されました。

明治六年には桜岡本家の桜岡源之允が村の戸長をしており、「ヤマニ」(ヤマニ)は桜岡本家の屋号ですから、「桜岡氏」とは、桜岡源之允のことで、彼が建立したと思われます。

道標は、明治に入ると久慈郡の郡役所が置かれ、商業都市として繁栄していた現在の常陸太田市へ、袋田から向かう道順を示しています。袋田滝本の七曲りを上り山道に出て、その山道から、月居観音の下(月居峠)を通り、小生瀬に通じる旧道があります。その旧道への登り口に建てられていたと思われます。その登り口の所で、右は「やま道」であり、左は、月居峠(月居観音がある)に向かう道を示しています。この道を行くと、月居峠から小生瀬に下りられます。小生瀬からは、高柴をへて、猪ノ鼻峠へ。猪ノ鼻峠

を越えると旧里美村小中(こなか)です。そこから南へ、大中(おおなか)、折橋から太田へと通じる小里街道があります。

現在の小生瀬、高柴への道は、昭和五十一年の全国植樹祭により、第二月居トンネルができて、道路のアスファルト化が進みました。昭和五十年代は一軒に一台の車社会が到来したのです。

さて、昭和二年(一九二七)に水郡線は上小川駅から袋田駅、大子駅まで開通します。袋田駅前に人々が集住し、袋田駅から「袋田の滝」を結ぶ観光道路が整備されていきます。

道標が建立された当時の袋田宿の道は、大切な田畑をさけて、滝川に沿った道であったと考えられます。すなわち、滝本七曲りから、滝川にかけられた見返り橋を渡ると、桜岡家(多八郎)があります。そこから、西へ向かい、もう一度、滝川を渡ると、桜岡本家(ここに大きな桜の木がありました)です。そこから、袋田宿の家々を通り、内方(うちかた)にでます。

もう一つは、桜岡家(多八郎)から北に向かい、滝本の集落を通り、もとの第一別館ホテルへ、片根、内方、小袋を通り、久慈川との合流点の大塩に出ました。この道は、袋田宿の組頭佐藤並衛門家が伝えた近津神社「お枅廻し」の片根、内方、小袋、五次郎内、岡、中津原の道筋に当たります。

久慈川には、鰐が淵の渡船の難所があったので、当時は大塩から一条に向かい、長福から、西金に出たのです。また、もとの第一別館ホテルの裏(湯の入り)から川西、久野瀬、池田への山道がありました。

明治六年当時、桜岡本家は現在の袋田温泉ホテル(昭和十一年開業の敷地にあり、長生閣(昭和五十年に焼失)には幕末に蒔蕪会所がありました。「蒔蕪」の売り買いなどで往来する人にとって、袋田から月居山中へ入ると、小中、太田を示す道標は大切な道しるべだったのです。

(常陸大宮市在住)

今思うこと

吉成英文

退職してから一五年が経ち、今になって振り返るとモー少し調べておけばよかったという事柄が多々あるのでここで提起しよう。まず大子町内の画人を取り上げてみよう。

外大野を拠点として活動した狩野東雲がいる。彼の出自や画歴については不明な点が多い。維新前は磐城平藩の御用絵師を勤め、維新時に禄を失い、外大野にやって来て某家に寄食していたとのことである。かつて一度だけ中央公民館で展示会が開催されたがそれきりである。町内を作画活動の拠点としながらも、矢祭地方や里美地方にまで足を伸ばしていることは確認されている。

外大野にはもう一人、鴨志田獄僊という画家がいた。雅号から水戸藩士で画師の萩谷僊喬の門人と推察されるが、なにぶん遺作が二、三点ほどしか確認されていない。

下津原からは鈴木皐雲が出ている。東京美術学校を卒業し、日本美術院を主体に作画活動していたが、評価はこれからという時に四四歳で死去している。町内では、一度だけ遺作展が開かれ図録も発行されたが、画業足跡等を丁寧に追いかけてみれば新たな展開があるかもしれない。

この他に相川の野内東郊斎、下野宮の岡田九皐、中郷の佐藤檀介、田村賢孝などがあるが、遺作はほとんど見当たらない。

また、黒羽町（現在の大田原市）の画師で鮎画の名手小泉檀山の門人録には大子地方の門人として前述の佐藤檀介をはじめ数人が名を連ねているが、現在まで続く家系の家には何か手掛かりになるような遺墨等が残っていないだろうか、とても気になるところである。

今この人たちの作品の有無と所在確認調査をして展示紹介す

ることは、郷土の文化人の先人顕彰として大いに意義のあることのように思われる。

加えて画人ではないが文人として著名な一人に貞孝がいる。貞孝の著「常陸紀行」（別名「漫遊記譚」）を紐解くと、その記述は常陸国内外に及び文中の挿絵も当代の著名画家が描いているが、貞孝の行動履歴等は判然としない。

もう一人私的に関心を持ったのが、中郷の修験龍宝院田村賢孝である。賢孝は、水戸藩の天狗諸生の乱に加わり、天狗党の分裂後は田中愿蔵と行動を共にして八溝山に立て籠もったが、二人とも塙代官所の役人に捕縛されている。その後、愿蔵は久慈川原で斬首刑にされているが、賢孝は学識の深さからか罪を許されて代官所勤務をしている。維新後は地元中郷村に戻り久野瀬の諏訪神社の祀官を勤めながら読書三昧・著述三昧の余生を送っているが、その著作物には大いに興味をそえられる。

次に、私がズーと気になっていたことに町内の水路のことがある。昨今、北茨城市の十石堀用水が「世界かんがい施設遺産」に認定されたが、大子町にもこれに匹敵するものが二カ所存在するかと思う。

一カ所は左貫の奥、内ノ草集落へ引いたと思われる用水路である。一度だけ対岸の林道から眺めたことがあるが、山腹を切り開き延々と続く景色にいたく感動したものである。一体、いつ頃誰により計画立案されたのか、工事はいつ頃か。工期はどのくらいを要したのか。これを解明するには地元に入りジックリと聞き取り調査が必要であろう。モー一カ所は八溝川の水を川山見落し岩を穿ちて引いた矢田・川山用水である。こちらの方は、堀野水之介の顕彰記念碑が建てられているが碑文については再検討が必要と思われる。かつて春には早苗が風にそよぎ、秋には黄金波打つ見事な田園風景であった。今は埋め立てられ工業団地となっているが、水路は現在もそのままである。

（常陸太田市在住）

大子那須楮、消えゆく農村の知恵と文化

石川麻衣子

私は現在、地域おこし協力隊として楮（こうぞ）の生産・加工を学んでいます。様々な方とお話する中で、大子町は日本の伝統文化を支える高品質な楮の産地にも関わらず、多くの方がその事実を知らないことに驚きます。そもそも、植物として育つ姿も加工した姿も、目に触れることなく県外に出荷されてしまうのですから、町の皆さんの意識に上らないことは無理ありません。楮が、現在の暮らしとはほど遠い存在であると感じます。

しかし、八〇歳を超える方とお話すると、楮にまつわる思い出を生き生きと語ってくださいます。その方たちが主に楮に関わっていたのは、おそらく戦後間もない頃だと思います。当時は、まだ町内のあちこちで楮が栽培され、多くの方が農閑期の仕事として楮に関わった経験があったようです。

旧上小川村（頃藤・大沢・栃原）は、昔から楮栽培が盛んな地域です。この辺りは傾斜地が多く、稲作に適しませんでした。水はけの良い傾斜地を利用して、お茶・麦・こんにやく・楮・杉（林業）・漆などの商品作物の栽培を組み合わせていました。お茶や楮は根を張り、斜面の土留めの機能もあります。また、耐陰性の高い蒟蒻の栽培法として、成長するにつれ日陰を作る楮の下に階層的に植える自然生（じねんじよ）があります。土地利用の観点だけでなく、冬季に南斜面の土の中で凍結させずに種芋を保存し、掘り起しの工程を省いた優れた方法でした。複数の作物を並行して育て、時期をずらして出荷することは、同時に価格変動のリスクに備えることでもありました。限られた土地や気候風土を上手に活用する知恵には、とても感銘を受けます。

当時の農家は家族経営でした。繁忙期になると、結取り（ゆいと）といって、隣近所の三、四軒の家で労働力を集中させて作業を分担していました。今日はAさんの家の作業、明日はBさんの家の作業、というように各家交代でお互い助け合ったのです。

楮は、蒸して皮むきする工程に人手が要り、結取りでまかっていたいました。正月前の寒い時期になると、夜中に竈に火を入れ、未明から二時間ごとに蒸しては剥いでを繰り返して、翌日夕方まで作業は続いたといえます。みなんでお喋りしながら手を動かし、その収入で豊かなお正月が迎えられるのです。「背中に子供をおぶりながらも結取りに出かけたよ」と、ある方が当時の様子を話してくださいました。大変な作業の裏側に、お正月前の高揚感や共同の夜なべ作業で賑わう様子が伝わってきました。

高度成長期を境に楮産業は衰退し、結取りは消滅しました。今は十人前後が集まって楮を蒸して皮剥きをします。私もこの作業に参加し、四方山話をしながら手を動かすうちに、私はその雰囲気がいっぺんで好きになりました。楮蒸しの場面は風物詩としてニュースで取り上げられることがしばしばあります。しかし映像からは、大事なエッセンスが抜け落ちてしまっていると感じるのです。そしてみなんで作業しながら過ごす結取りの時間や空間にこそ、無くしてはならない農村文化があると実感します。

現在大子の楮は、ご高齢のごくわずかな農家の方に支えられています。このままでは消えゆくのも時間の問題です。町内外の多くの人にこのことを知ってもらおうと同時に、楮に関わって一緒に結取りの雰囲気を感じていただきたいです。多様な人が関わり、暮らしの中で楮が身近な存在となるような場が必要だと考えます。そして大子の楮が町の多くの人に愛される存在になってほしいと願って、活動を続けたいと思います。

（大子町大子在住）

北畠親房と依上保

皆川敦史

南北朝時代の公卿である北畠親房は、後醍醐天皇の信任が厚く、元弘三年（一二三三）、義良親王（後の後村上天皇）を奉じて陸奥国多賀城に下向し、陸奥守となった嫡子顕家とともに奥州経営の実権を握っていた。

建武新政の挫折により、建武三年（一二三六）、足利尊氏の反乱軍を追って西上した顕家とともに上洛し、そのまま京都にとどまって再び国政に携わることとなった。尊氏再挙の後、親房の画策によつて後醍醐天皇を吉野（奈良県南部）に迎えて南朝を開き、京都の北朝・幕府と対抗した。

暦応元年（一二三八）、顕家が北朝との戦いに敗れて戦死すると、親房は東国における南朝勢力の回復のために、伊勢国大湊から海路で東国を目指した。東国へ向かう途中に暴風雨にあつて常陸国東条浦（稲敷市）に漂着した親房一行は、神宮寺城（同市）に入つたが、すぐに北朝方の攻撃により落城し、小田治久に迎えられて小田城（つくば市）に入った。この城に滞在中、「神皇正統記」が執筆されたことは名高い。この間の「依上保」（大子町）の動きについては、中世文書（出典『大子町史資料編上巻』）からうかがい知ることができる。

○建武元年（一二三四）三月十八日の「後醍醐天皇綸旨案」に、「当国依上保令知行、御年貢無懈怠司令致御沙汰者」が初見である。鎌倉幕府滅亡後、没收地となった当保は、建武新政府の重要な料所となり、陸奥国司である顕家に年貢沙汰を命じており、その管理するところであつた。

○同年四月十六日の陸奥国宣案によれば、顕家は、当保の年貢徴収を南朝の武将である陸奥国白河領主結城宗広に委任している。

○建武二年十月五日の「後醍醐天皇綸旨」によれば、「陸奥国依上保・金原保、白河庄内金山郷等」が勲功賞として、宗広の嫡子親朝に安堵される。

○同年十月二十六日の「陸奥国宣案」で、親朝は、当保などの検断奉行に任ぜられている。

○建武四年十二月二日の書状で、宗広は子の親朝に戦略的な道路として、「奥道」（下野国から陸奥国に至る街道）に代わつて、「依上道」の確保を説いている。

親房は、治久とともに北朝方と戦いながらも、南朝勢力を立て直すべく精力的に軍勢の支援を求める書状を書いた。特に、親朝に対しては、何度も催促、要請、懇願の書状を届け、その数は約七〇通にも及んだ。特定の人物に出した一個人としての書状では、「中世史上希有な例」であると言われている。その理由の一つには、親朝の領有している久慈川上流の「依上保」は、常陸国と陸奥国の境目の要地であり、かつ、親房の嫡子顕家が生前に後醍醐天皇から宛行われた土地であつたことが考えられる。この地を宗広に預け置いた経緯から親朝が依上保に出兵すれば、常陸国南部と陸奥国が一举に結合することになり、そこから陸奥国の援軍を関東にも容易に引き入れ、南朝方を優位に導くことが可能であつた。

しかし、暦応二年（一二三九）、後醍醐天皇が死去し、義良親王が践祚したが、親房は小田城を動くことができず、暦応四年、北朝の高師冬によつて攻め落とされ、ついで関城（筑西市）に移り、大宝城（同市・下妻市）とともに抵抗した。親房は、度々親朝に書状を送つて来援を促したが、援軍は来なかつた。

康永二年（一二三三）に入ると、攻防は激しくなり、苦戦に至つたこの時期に、頼みとしていた親朝は北朝に下り、関城・大宝城は落城した。この結果、親房は常陸国から吉野に帰り、常陸国における南北朝の戦いは事実上終わりを告げた。（大子町池田在住）

移住者の活躍する町

大金祐介

地方の過疎化が深刻化するなか、都市から地方への移住が注目されている。地方が都市からの移住者を積極的に受け入れることで、過疎化に歯止めをかけようというわけである。しかしその一方で、地方は閉鎖的で、移住者に厳しいという指摘がある。大子町もご多分に漏れず移住者を積極的に受け入れる立場にあるが、歴史的な観点から見た時、大子町は移住者にとってどのような町であったのだろうか。

明治四十三年（一九一〇）三月二日付の「いはらき」新聞（三六面）に掲載された大子町紹介記事「大子号」の「主なる商店の営業振り」という記事に注目してみよう。同記事は、当時の大子町の商店の様子を紹介する記事である。当時の繁盛店として、外池商店、樋口本店、樋口呉服店、三河屋商店、助川百貨店、吉見屋商店、齋藤運送店、川口商店（カクマン）、川口商店（ヤマリ）、松浦商店の一〇店が紹介されている。これら繁盛店一〇店の創業家の出身地を調べてみたところ、三河屋商店、齋藤運送店の二店を除く八店の創業家の出身地を明らかにすることができた。

外池商店の外池家は、滋賀県の出身であった（蝦名賢造『日本橋の近江商人 柳屋外池 宇平兵衛 寅松家の四〇〇年』など）。同店は、寛政四年（一七九二）に外池家が番頭を派遣して経営する支店の一店として開店し、明治元年（一八六八）に外池家の直営となった。呉服部、肥料部、醤油醸造部の三部門を持ち、度量衡器の販売や塩の元売捌きを兼ねる保内郷屈指の本店であった。

樋口本店の樋口家は、新潟県の出身であった（ご子孫からの聞き取り）。同店は、明治三年に創業し、金物、肥料、荒物、米穀などの小売、蒟蒻、楮の取引、旅客や貨物の運送業などを手がけ、各

種商品の特約販売店や大同生命保険の代理店でもあった。樋口呉服店は、同二十四年に樋口本店の呉服部として創業し、同四十年）に独立したものであった。樋口本店、樋口呉服店は、ともに保内郷屈指の本店であり、外池商店とは肥料や呉服の販売で激しく競い合っていた。

助川百貨店の助川家は、筑波の出身であった（會沢晴美『住まいの情景』）。同店は、明治二十七年に創業し、雑貨、小間物、陶漆器、金物、玩具などの小売を手がけていた。他店に先駆けて先進的な陳列販売を導入したことで大変な好評を博しており、一時期、二店の系列店を有していた。

川口商店（カクマン）、川口商店（ヤマリ）、松浦商店の三店は、いずれも保内郷屈指の蒟蒻問屋の本店である。川口商店（カクマン）の川口家と川口商店（ヤマリ）の川口家は、ともに新潟県の出身、松浦商店の松浦家は、京都府の出身であった（石井良一『郷土の史実 第一集』）。いずれも蒟蒻取引の都合から明治維新の前後に大子町に移住してきた人々であった。

吉見屋商店の大金家は、今回、創業家の出身地が判明した八店のなかで唯一の大子出身であった。同家は明治中期に興った分家であるが、本家は江戸時代から大子に居住していた。記者は、そのあたりの事情を承知していたのだろう。吉見屋商店は、記事の中で一〇店中唯一「土地生ぬきの店」と紹介されている。

このように、明治四十三年当時の大子町の繁盛店一〇店のうち、少なくとも七店は大子町外からの移住者が創業した店であった。山間に位置していることから閉鎖的に感じられ、ともすると移住などということはここ最近の話と思ってしまうが、山間に位置しているからこそ多くの特産品に恵まれた大子町は、商売を志す移住者にとって魅力的な土地であった。歴史的な観点から見た時、大子町は、移住者が多く集まり、移住者が活躍する町であった。

（大子町大子在住）

水郡線の産みの親 根本正先生を想う

令和元年の台風一九号の水害により水郡線の第六久慈川橋梁が崩落したため不通であった大子駅と袋田駅間が、今年の三月二十七日に復旧しました。私の認識では大子町における水郡線にもたらされた災禍は、これが三度目であったかと思っています。

初めの惨事は、昭和十四年（一九三九）八月五日夜、北田気地内の通称嵐山で起きた、大雨による土石流に呑み込まれた列車が久慈川に転落した事故でした。この時、乗員及び乗客合わせて死者、行方不明者一八名の犠牲者を数えました。次の惨事は、太平洋戦争末期の昭和二十年七月十八日、アメリカの空母艦載機による大子駅の空襲です。この時も、駅員二名の尊い命が戦場から遠く離れた地において失われ、駅舎も百発以上の機銃掃射により大きな被害を被りました。水郡線はこれまでこのような災禍に見舞われながらも、それらを乗り越えて、沿線地域の発展に大きく寄与し、地域住民の大切な足として今日まで存続してきています。

この水郡線を開通させた最大の功労者が根本正（しょう）先生です。常陸大子駅のロータリー脇にある胸像の人です。これは、昭和四十三年に大子駅開通四〇周年を記念して建立されましたが、胸像としては二代目となります。初代は、大子駅開通を記念して昭和五年に十二所神社境内（現在のだいご小学校の校庭）に建立されましたが、太平洋戦争中の金属供出で胸像部分は供出されてしまい、現在は台座部分が残るのみとなっています。

先生は、嘉永四年（一八五二）に那珂郡東木倉村（現在の那珂市）に生まれました。幼少時から好学勤勉であり、一三歳の時、水戸藩士がパリ万博のお土産として持ち帰った時計とマツチを見て西洋文明に憧れ、その後、上京し人力車夫をしながら勉学に励み、キリスト教の洗礼を受けました。二八歳の時、渡米して働きながらオー克蘭小学校及びホプキンス中学校で学び、篤志家の支

援を受けながらバーモント大学を卒業しました。

帰国後は、自由民権運動の指導者の板垣退助に師事し、愛国公党（後の政友会）に加わり政治家の道を踏み出しました。二回の落選を経験した後、明治三十一年（一八九八）の衆議院議員選挙で初当選後は、子どもの教育を受ける機会均等を図る法案や未成年の喫煙及び飲酒を禁止する法案の成立に尽力した一方で、現在の水郡線の母体となる白水線（白河・水戸間）建設の建議案を同四十四年の帝国議会に提出し、ここに鉄道建設案が日の目を見ました。翌年には、二回目の建議案が提出、承認され、これにより白河の先の郡山が加わり、以後、名称が水郡鉄道とされました。しかし、建議案が可決しても、政権交代等により予算化は遅々として進みませんでした。一方、水戸・太田町（現在の常陸太田市）間は太田鉄道株式会社により同三十二年に開通していましたが、経営不振により安田財閥の水戸鉄道株式会社に売却されました。さらに、水戸鉄道（株）は、政府から私設鉄道開設の認可を受け、上菅谷・大宮間を大正七年に開通させました。これにより、水戸鉄道（株）と競合する関係上、従来の水戸・郡山間は大宮・郡山間となり、水郡鉄道建設案は大郡鉄道に変更されました。

大正九年（一九二〇）に予算化が実現し、大郡鉄道建設は大宮からスタートしました。鷲の巣隧道や北田気嵐山、久慈川を渡る鉄橋の難工事、西金駅や大子駅設置の難題を解決し、昭和二年（一九二七）に大子駅まで全線開通、同年、政府は水戸鉄道（株）が経営していた路線を買い上げ国有化しました。その後、大子駅以北の工事が進められ、同九年に郡山から水戸までの全線が開通しました。実に、最初の建議案提出から二三年の歳月が流れていました。残念ながら、先生は前年の同八年に逝去されていて、水郡線全線開通を見ることはできませんでした。

参考文献『大子町史 通史編下巻』 石井良一『水郡線の歴史』

根本正顕彰会『根本正伝』

（神長 敏）

『ほない歴史通信』総目次(第八一号〜第二〇〇号)

第八一号 二〇一六年(平成二十八)十二月一日

合併後、二十年の歴史を考える

大子盆地の形成と断層活動

大子町城館跡探訪九

茨城県北芸術祭を終えて

「高田久右衛門日記」に見る保内

生瀬の乱の記事のある「近代諸士伝略」と伊那

備前守没年の問題点(下)

私の太平洋戦争記(七)

第八二号 二〇一七年(平成二十九)三月一日

佐竹氏研究の最前線

——『佐竹一族の中世』の刊行によせて——

大子町に来て思う

「ふみの森もてぎ」の開館と歴史資料展示室の

展望

生瀬の乱の伝承の成立と変容過程について(上)

大生瀬分校回顧記——学校事情今昔考

依上地区、ある農業青年の挑戦物語(下の二)

——特産品・りんごのルーツを探る(五)——

関鉄之介の日記を読む(二)

こんにやくの神様(四)

私の高祖父のコンニャク栽培研究(病害防除と薬剤
散布)

第八三号 二〇一七年(平成二十九)六月一日

地域に根ざした学校給食をどうつくるか

——次代の担い手を育てる一つの切り口として——

野内氏の秋田国替えと由緒をめぐる争い

ミヤマスカシユリ

生瀬の乱の伝承の成立と変容過程について(下)

戦場となった大子西部の中世城郭

大生瀬坂西地区の農事と神事今昔考

こんにやくの神様(五)

私の高祖父のコンニャク栽培研究(品種と品種改

良)

第八四号 二〇一七年(平成二十九)九月一日

大子の古文書は今

大子町小中学校校歌の成立と学校所在地の地域

環境(上)

歴史を物語るもの 道標

ミヤマスカシユリ増殖大作戦

大子町・鎮守の杜(七)

十二所神社(大子町大子後山四五八)

依上地区、ある農業青年の挑戦物語(下の二)

——特産品・りんごのルーツを探る(六)——

『大子町史』と活版印刷の魅力

拓本を通してみた文化財の魅力

第八五号 二〇一七年(平成二十九)十二月一日

江戸の詩人大窪詩仏(二)

大子町小中学校校歌の成立と学校所在地の地域

環境(中)

齋藤 典生

平岡 崇

野内 秀伸

高橋 裕文

藤井 達也

齋藤 仁司

家田 望

藤井 達也

阿久津 久

綿引 逸雄

出村 尚英

高根 信和

齋藤 典生

井上 和司

家田 望

島崎 和夫

阿久津 久

情緒のあった町堀―昭和十年代―
大子町上岡の人形芝居「亀井座」

百年前の大子を行く(四)

荒蒔城に伝わる戦いの記憶

依上地区、ある農業青年の挑戦物語(下の三)

―特産品・りんごのルーツを探る(七)―

第八六号 二〇一八年(平成三十)三月一日

次の世代に継承していくために

江戸の詩人大窪詩仏(二)

久慈川の風物詩、シガについて

大子町小中学校校歌の成立と学校所在地の地域

環境(下)

産地づくりに向けた公的支援の展開(上)

―特産品・りんごのルーツを探る(八)―

華岡青洲と吉成有識(三光院)

編集後記

第八七号 二〇一八年(平成三十)六月一日

文化遺産シンポジウムから見えたこと

江戸の詩人大窪詩仏(三)

大生瀬分校の思い出―一年生から四年生まで―

近代化前夜のまちなみ

「打越地区の屋号と生業」「交通事情」今昔考

大子町・鎮守の杜(八)

関戸神社(大子町頃藤六五〇六)

産地づくりに向けた公的支援の展開(中)

―特産品・りんごのルーツを探る(九)―

熊岡美彦と袋田風景

會澤 晴美

成井 重美

大金 祐介

藤井 達也

齋藤 典生

家田 望

島崎 和夫

鈴木 文二

阿久津 久

齋藤 典生

野内 泰子

家田 望

藤井 達也

島崎 和夫

益子 忠久

大金 祐介

齋藤 仁司

高根 信和

齋藤 典生

神長 攻

編集後記

第八八号 二〇一八年(平成三十)九月一日

百年経てば古文書

―町民の宝・公用文書の保全を考える―

江戸の詩人大窪詩仏(四)

日々の暮らしの中にあるもの

大子のお医者さん(二)

【史料紹介】「道中行程記」―棚倉から八溝山への道

大子町の経済更生運動と農村改良劇「栄ゆく

村」(二)

産地づくりに向けた公的支援の展開(下の二)

―特産品・りんごのルーツを探る(二〇)―

第八九号 二〇一八年(平成三十)十二月一日

「袋田の滝」、その昭和史の一端を探る

―昭和二年、投票による観光地選定の断片―

江戸の詩人大窪詩仏(五)

従是奥は真つ暗やみぞ

―「八溝」の名称を史料から探る―

大子町・鎮守の杜(九)

熊野神社(大子町浅川三九〇三)

菊池雄二郎氏所蔵文書について

大子のお医者さん(二)

小生瀬宝泉寺の扉に見る大子の中世(二)

大子町の経済更生運動と農村改良劇「栄ゆく

村」(二)

家田 望

齋藤 仁司

島崎 和夫

和田 宗介

大金 祐介

藤井 達也

井上 和司

齋藤 典生

齋藤 典生

島崎 和夫

飯村 尋道

高根 信和

野内 正美

大金 祐介

藤井 達也

井上 和司

第九〇号 二〇一九年(平成三十一)三月一日

青い目の人形は何処へ

―慈愛と勇気で護られた文化遺産の在り方―

トンネルを抜けると保内郷

―久慈川・南郷道・水郡線・心ある人々―

都市交流に携わって三〇年

教員かけ出しの頃の思い出(上)

―最初の赴任地依上中学校での日々―

江戸の詩人大窪詩仏 余録

小生瀬宝泉寺の扉に見る大子の中世(二)

和田昭為の出自と和田氏継承について

現代に姿を現した古道―「依上道」と「南郷道」―

【史料紹介】「御用留」に見る下野宮村と他村の

交通

町堀と人の「まちなみ」を次世代へ

大子町役場庁舎の新築に寄せて

四三万人の大移動(上)

産地づくりに向けた公的支援の展開(下の二)

―特産品・りんごのルーツを探る(一一)―

こんにやくの神様(六)

私の高祖父のコンニャク栽培研究(販売について)

編集後記

第九一号 二〇一九年(令和元)六月一日

平成時代と大子町の学校

幼年期の思い出

教員かけ出しの頃の思い出(中)

―最初の赴任地依上中学校での日々―

四三万人の大移動(下)

続・大子町役場庁舎の新築に寄せて

井上 和司

柳下 征史

齋藤 庄一

高根 信和

島崎 和夫

藤井 達也

千葉 篤志

藍原 怜

武子 裕美

木村 直幸

大金 祐介

野内 泰子

齋藤 典生

家田 望

家田 望

藤井 達也

大畠 一芳

高根 信和

野内 泰子

大金 祐介

産地づくりに向けた公的支援の展開(下の三)

―特産品・りんごのルーツを探る(一二)―

大子町の経済更生運動と農村改良劇「栄ゆく

村」(三)

新たな仕事への抱負

編集後記

第九二号 二〇一九年(令和元)九月一日

「袋田の滝」、その昭和史の一端を探る(続)

―昭和二十五年、「茨城百景」県民投票を通して―

夏の日の記憶

教員かけ出しの頃の思い出(下)

―最初の赴任地依上中学校での日々―

大子町の新発見城郭その一・立神古城について

小生瀬宝泉寺の扉に見る大子の中世(三)

私のマラソン人生(二)

生瀬の乱の発生年代の考証について

大子の今昔写真帳No.1 旧黒沢小学校校舎・

正門

第九三号 二〇一九年(令和元)十二月一日

災害から大子の歴史と文化を守る

【ルポ】台風一九号上陸後の大子町を歩いて

私のマラソン人生(二)

偶然の巡りあわせ

小生瀬宝泉寺の扉に見る大子の中世(四)

産地づくりに向けた公的支援の展開(下の四)

―特産品・りんごのルーツを探る(二三)―

大子の今昔写真帳No.2 町立中央公民館

齋藤 典生

井上 和司

藤田 貴則

大金真理子

齋藤 典生

赤津 康明

高根 信和

五十嵐雄大

藤井 達也

小室 健二

皆川 敦史

大金真理子

添田 仁

藤井 達也

小室 健二

大金 祐介

藤井 達也

齋藤 典生

大金真理子

第九四号 二〇二〇年(令和二)三月一日

調査が進む大子の城跡

生瀬古城(大子町小生瀬字古城)

大子町の新発見城郭その二・左貫要害について

私のマラソン人生(三)

大子町・鎮守の杜(一〇)

諏訪神社(大子町西金字寄居二四九)

大子町の経済更生運動と農村改良劇「栄ゆく

村」(四)

産地づくりに向けた公的支援の展開(下の五)

―特産品・りんごのルーツを探る(二四)―

大子の今昔写真帳No.3 JR常陸大子駅

第九五号 二〇二〇年(令和二)六月一日

『事績集』の刊行に寄せて

南会津の名倉坂に斃れた佐川彌次衛門

私のマラソン人生(四)

大子自動車株式会社の軌跡(前)

大生瀬打越地区の農事今昔

公家社会で話題になった袋田の滝の歌

水郡線と西金駅

大子町の新発見城郭その三・袋田要害について

第九六号 二〇二〇年(令和二)九月一日

感染症と生きる人々

ご縁を感じる大子町(上)

国勢調査百年に寄せて

大子町の新発見城郭その四 頃藤地区の二つの

城館跡について

藤井 達也

高橋 宏和

五十嵐雄大

小室 健二

高根 信和

井上 和司

齋藤 典生

大金真理子

齋藤 典生

飯村 尋道

小室 健二

大金 祐介

齋藤 仁司

藤井 達也

神長 敏

五十嵐雄大

藤井 達也

赤地 靖士

大金 祐介

五十嵐雄大

『遠ざかる昭和の記憶』に寄せて

大生瀬打越地区の「御数珠廻し」

産地づくりに向けた公的支援の展開(下の六)

―特産品・りんごのルーツを探る(二五)―

大子の今昔写真帳No.4 金町通り

第九七号 二〇二〇年(令和二)十二月一日

社会の仕組みはどこまで変わる?

―新型コロナウイルス禍のなかで注視しておきたいこと―

ご縁を感じる大子町(下)

『大子地域の旧町村長事績集』を読んで思うこと

戦国の世を偲ぶ荒蒔城趾と姫塚

大子自動車株式会社の軌跡(後)

内大野十二所神社の棟札と城館について

岩城氏の太子統治

第九八号 二〇二一年(令和三)三月一日

漱石と枕水

大子の野球人

芦野倉地区に残る中世城館跡と棟札

初めての皇室来大とレスリング 五十嵐雄大 野内智一郎

「太子」呼称の変遷

『常陸国北郡里程間数之記』と大生瀬の地名

【資料紹介】「茨城県久慈郡依上村々勢要覧」(昭和十一年)

和十一年)

第九九号 二〇二一年(令和三)六月一日

昔の新聞記事から歴史を探る

先崎 千尋

齋藤 仁司

齋藤 典生

大金真理子

齋藤 典生

赤地 靖士

木村 直幸

飯村 尋道

大金 祐介

五十嵐雄大

藤井 達也

井上 和司

赤津 康明

藤井 達也

藤田 貴則

藤井 達也

齋藤 仁司

齋藤 典生

藤井 達也

和田坂の名馬「宮口」の墓と桜
大子町・鎮守の杜（一一）

根渡神社（大子町大沢四〇六）

依上道（南郷道）沿いの新規城館遺構について
水郡線の全線運転再開に寄せて

皇室の大子町来訪について

産地づくりに向けた公的支援の展開（下の七）

―特産品・りんごのルーツを探る（二六）―

大子の今昔写真帳 No. 5 旧池田小学校

第一〇〇号 二〇二二年（令和三）九月一日

経済と歴史の関係性について

「保内郷」の由来を考える

郷土を愛すること

私の研究活動と大子町

広済寺の「水戸藩十九烈士」位牌と菊池忠右衛門

門

栃原上集落の四社合同遷座祭

祖母の結婚前までの暮らし（一九七三年聞き取り）

道標の拓本採取調査の終了を前にして

袋田小学校玄関前庭の道標

今思うこと

大子那須楮、消えゆく農村の知恵と文化

北畠親房と依上保

移住者の活躍する町

水郡線の産みの親 根本正先生を想う

第一〇〇号記念付録

『ほない歴史通信』総目次（第八一号〜第一〇〇号）

飯村 尋道

高根 信和

五十嵐雄大

大金 祐介

神長 敏

齋藤 典生

大金真理子

高梨 哲彦

藤井 達也

松本 成夫

源川 真希

飯村 尋道

大森 政夫

相沢 一正

綿引 逸雄

野内 正美

吉成 英文

石川麻衣子

皆川 敦史

大金 祐介

神長 敏

積み重ねること二五年、第一〇〇号目の感慨

―編集後記に代えて―

齋藤 典生

付記

一、『ほない歴史通信』の全ての号は、大子町立中央公民館別館（図書館）プチ・ソフィア及び大子町教育委員会事務局生涯学習担当（中央公民館内）で閲覧できます。

二、『ほない歴史通信』の全てではありませんが、残部がございます。残部についてはご希望の方に差し上げますので、中央公民館内の生涯学習担当までお申し出ください。

三、『ほない歴史通信』の全ての号は、大子町文化遺産のホームページでも閲覧できます。どうぞご利用ください。

ほない歴史通信

検索

積み重ねること二五年、第一〇〇号目の感慨

―編集後記に代えて―

第一〇〇号記念号をお届けします。一九九六年(平成八)十二月、B5判四頁の手づくり感あふれる真にささやかな体裁で創刊された小誌『ほない歴史通信』は、季刊のペースを堅持して二五年、一号一号積み重ねてきた結果として一〇〇号目を迎えることができました。これもひとえに、多くの執筆者の皆様、熱心な読者の皆様の支えがあつたればこそその到達点であると思います。創刊号から関わってきた編集人の一人として、心からの感謝の念を表すると共にここまで継続できたことを率直に喜びたい。

創刊当初は編集人の原稿を中心に誌面を構成していましたが、やがて頁数が増えると共に編集人以外の方々に執筆を依頼する機会が多くなってきました。例えば、近年発行の第八一号(第一〇〇号分の場合、外部執筆者の割合は約七割近くに達します。編集人からの執筆依頼に応えていただけの外部執筆者の協力の重みが、この数字から見えてきます。本記念号も例外ではなく、高梨哲彦大子町長ほか一名の方が、ご多忙のなか時間を割いて玉稿を寄せてくださいました。こうした方々の強力な支えがあつての一〇〇号であることを痛感しています。

「初心忘るべからず」の箴言にならない、第一〇〇号目を機に本誌創刊にこめた「初心」を振り返ってみることにします。町史編さん事業が一九九三年度で終了した後も、資料の整理や目録との照合等の作業が続きました。そのなかで、大子という地域社会のもつ多様な歴史、その豊かさを感じ、町所蔵、個人所蔵を問わず歴史資料が大切に保管され、しかも活かされなければならないとの思いを強くします。私は、本誌創刊号に次のように記しました。

「中央公民館の歴史資料室と資料所蔵者、並びに町民の方々を結

び付け、歴史資料の大切さを学び合えるような何かがほしい、そして大子町が歴史を活かした個性ある町へと成長するきっかけとなるような何かがつくれないか。この『ほない歴史通信』は、そうした問題意識のなかから生まれました」と。ここに示された問題意識がいわば創刊の原点となりました。今、改めてかみしめたと思います。

第一〇〇号は大きな節目ではあつても、一つの通過点です。さらに前へと進まなければなりません。第六三号から大子町教育委員会が発行者となり、本誌の版型もA4判に変わり、そして何より町内全世帯の回覧に供する仕組みがとられるようになりました。熱心な読者から、本誌に対する様々なご指摘が届くようになるのはそれからです。実にありがたいことです。ご指摘がきっかけで、新たな史実の解明につながることも多々あります。こうした読者との関わりを大切にしながら、大子地方の歴史を多面的な切り口から照射し、まちづくりと連動しつつ歴史の奥深さをお伝えできるように冊子を目指したい、そう考えています。読者の皆様のさらなるご支援を願うばかりです。

なお、第八〇号記念付録『ほない歴史通信』総目次の続編として、第八一号(第一〇〇号)の総目次を巻末に掲載しました。先の『総目次』と合わせてご活用いただければ幸いです。(齋藤典生)

編集 大子町歴史資料調査研究会

編集人 齋藤 典生 (大子町歴史資料調査研究員)

藤井 達也 (大子町歴史資料調査研究員)

飯村 尚史 (大子町教育委員会事務局)

神長 敏 (大子町教育委員会事務局)

発行 大子町教育委員会

茨城県久慈郡大子町大字池田二六六九番地

☎0295(72)1148

発行日 二〇二一年(令和三)九月一日